

九州大学総合研究博物館 ニュース

The Kyushu University Museum News

九州大学所蔵標本紹介

九州大学総合研究博物館ニュースNo.1とNo.2にアンケート結果を掲載しましたように、九州大学には700万点を超える標本資料がそれぞれの研究院や研究施設に分散して保管されています。これらの標本資料の多くは、総合研究博物館の建物ができた時点で総合研究博物館に移され、一般の方々に公開するとともに、学術資料を用いたさまざまな研究に便宜を計っていくことになります。ここでは、それぞれの研究院や研究施設に分散して保管されている標本資料について、それぞれの専門の先生方に、シリーズとして、標本コレクションを紹介して頂くことにします。今回はその第1回として、昆虫標本を取りあげました。

九州大学の昆虫コレクション

資料部昆虫分野主任
総合研究博物館助手

小島 弘昭

九州大学には400万点を超す国内最大規模の昆虫標本が存在します。また、これら標本資料とあわせ、文献資料も充実しており、アジア地域でも有数の昆虫学関係のリファレンスコレクションとなっています。この存在は、国内外の関係者には広く周知されていますが、学内では、その存在を知らない方も少なくありません。

これらのコレクションをもとに、これまで実に1,000種を超す昆虫の新種が、九州大学の研究者により発見記載されてきており、日本をはじめとするアジア-太平洋地域の昆虫相解明に大きく貢献してきています。現在でも、九州大学の昆虫研究者は、アジア地域を中心に世界各地へ活発に調査に出かけ、毎年、5万点近い標本を追加し、コレクションを充実させています。九州

大学の昆虫コレクションの代表的なものとしては、以下のようなものがありますが、今回は、熱帯農学研究センターの緒方一夫教授にアリ類コレクションの紹介をお願いしました。

農学研究院昆虫学教室

カメムシ類コレクション(13万点)、ハチ類コレクション(39万点)、ゾウムシコレクション(21万点)、タマバエコレクション(15万点)、杉谷コレクション(3.6万点)、ミクロネシア産昆虫コレクション(2.7万点)

比較社会文化研究院生物多様性講座

アジア産チョウ類コレクション(3万点)、ハエ類コレクション(20万点)、クワガタムシ類コレクション(1万点)

熱帯農学研究センター

アリ類コレクション(1万点)

生物的防除研究施設

寄生蜂コレクション(2.5万点)

総合研究博物館

佐々治コレクション(6万点)、宮川コレクション(3.5万点)

アリ類コレクション

資料部昆虫分野
熱帯農学研究センター教授

緒方 一夫

【アリという昆虫】

アリ類は、どこにでもいて比較的容易に見分けられるし、また目につきやすい昆虫であることから、身近な生物といえるでしょう。たくさんのアリが行列を組んで地上を歩いている姿、あるいは屋内外で餌に群がる姿はよく目にするとこです。しかし、その種類が日本だけでも270種以上、世界からは約2万種というと驚かれる人も多いでしょう。ただし、現在世界のアリに関して、学名がついているのはその約半分にすぎないと見積もられています。

アリ類は分類学的にはハチ目アリ科というひとつの「科」を形成する生物群です。日本産のアリ類はここ20年で随分と研究がすすみ、ほぼ種までの同定は可能となっています。しかし、世界のアリ類、とくにアジア産についてはまったくの混乱状態です(緒方, 1999)。

それにはいくつかの理由があります。まず第一に、

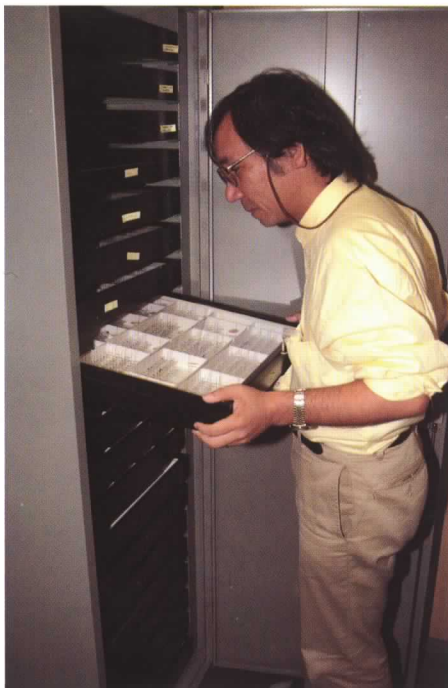


図1. 熱帯農学研究センターのアリコレクション
(コレクションを調べているのは著者)



図2. 日本産アリ類の参照標本(熱帯農学研究センター所蔵)

これらの地域のアリ類は植民地時代に欧米の研究者によって記載されているのですが、その基となった標本は各国の博物館に分散して保存されていること。第二に基づいた標本というのは当時の旅行者たちが散発的に採集した標本であり、必ずしも十分な個体数ではないこと。第三に当時の研究者のネットワークは貧弱で包括的な標本比較がなされていないこと、などによるものです。したがって、学名があるものの、どのような種を指しているのかよくわからないというのが実状で、多数の同物異名が未検討のまま残されています。また、多くの未記載種が残されているのも事実です。このような状況を解決するためには、記載種を再検討すると同時に、多くの地域の標本を比較する必要があります。

【九州大学のコレクション】

日本産アリ類:日本産アリ類は現在のところ273種の分布が確認されています(アリ類データベースグループ, 2003)。私がアリの研究を始めたのは1970年代の半ばで、当時の昆虫学講座の平嶋義宏教授の示唆によるものです。その頃までは、まだ180種程度のアリ類がリストアップされている状態でした。1980年代からこれらの整理が急速にすすみ、「日本産アリ類の検索と解説」として刊行しました(日本蟻類研究会編, 1989, 1991, 1992)。これらの中で図示してあ

